「ことば遊び」から見る補い合い

――カトリック麹町聖イグナチオ教会国際青年会の例

Complementarity through “Word Play”: The case of
St. Ignatius Church, St. Ignatius International Youth Ministry

増田　紗斗

キーワード：対話，コンヴィヴィアリティ，創造性，カトリック教会，多文化共生

This paper examines how ““Word Play”” as an interactive method creates a complementary daily life at the St. Ignatius International Youth Ministry（SIIYM）of St. Ignatius Catholic Church, Tokyo. This “Word Play” refers to a situation in which a word or expression is separated from its standard usage and contextualized so as to fit the atmosphere of a situation, or the meaning of the word or expression is further emphasized. Through “Word Play”, I aim to present one of the techniques for living together with various others in a better way.

In 2006, the Ministry of Internal Affairs and Communications issued the “Plan for Promotion of Multicultural Coexistence in Local Communities,” and local governments have been exploring approaches to promote multicultural coexistence. However, the dichotomous views of “Japanese” versus “Foreigners” and efforts biased toward Japanese language education remain as unresolved issues. I will use the conviviality argument as an approach to understanding a multicultural situation to overcome issues

related to multicultural coexistence. Conviviality enables dialogue by positively evaluating one's own imperfectness and accepting the imperfectness of others. We can build methods and a loose network for a better life through dialogue. Therefore, this paper will examine the effectiveness of conviviality to show how to better live with others in multicultural situations through the practice of "Word Play" at SIIYM.

The episodes presented in this paper are based on records of my fieldwork at SIIYM since May 2019.

目次

はじめに
Ⅰ　フィールド概要、先行研究の整理、問題の所在
　1　フィールド概要
　2　先行研究の整理
　（1）多文化共生の課題
　（2）コンヴィヴィアリティ論
　3　問題の所在
Ⅱ　「ことば遊び」
Ⅲ　「ことば遊び」のプロ―Renzo
Ⅳ　Language Cafe
Ⅴ　考察
　1　「ことば遊び」という実践
　2　コンヴィヴィアルな能力としての「ことば遊び」
おわりに
注
登場人物一覧
参考文献

はじめに

この論文は、東京都千代田区にあるカトリック麹町聖イグナチオ教会（以下、麹町教会）の国際青年会（St. Ignatius International Youth Ministry：以下、SIIYM）を対象に、彼らの「ことば遊び」な対話方法が補い合いの日常を作り出している姿を描く。これを通して、さまざまな他者とより善く共に生きていくための術の一つを提示することを目的とする。

2006年に総務省から「地方における多文化共生推進プラン」が出されてから、各自治体で多文化共生に向けたさまざまな取り組みが模索されてきた。例えば、案内板やホームページの多言語表示、在日外国人向けの日本語教室、やさしい日本語マニュアルの作成、多文化交流イベントなどである。どの取り組みも「正しく」特定の言語を使い、正確にあらゆる情報を伝えること、得ることを目的としている。また、正しいある特定の言語を互いに使用できる、使用させることを前提としているため、その条件に合う者同士でない場合には対話が困難になる。ある特定の言語を「正しく」用いることができなくても、互いに対話を行う方法はあるのではないだろうか。その方法を示してくれるのが、本稿の対象であるSIIYMの実践である。SIIYMのメンバーは「ことば遊び」を駆使してコミュニケーションを行っている。またそれを通して言語の習得もしている。ここで用いる「ことば遊び」とは、ある単語や表現が正規の用法を離れ、その場の「ノリ」に合うよう文脈が組み替えられている状態やよりその意味が強調されているような状態を指している。「ことば遊び」を駆使した対話を通して、SIIYMが補い合う関係性を築き共同性を発揮する土台を形成しようとしている姿を描いていく。SIIYMの実践は、多様な他者とより善く生きていくことを目指す多文化共生の議論に具体的な実践例を示し、多文化共生の課題を克服する可能性を持つ。

本稿は、以下のような構成となっている。まずⅠで麹町教会、SIIYMについて概要を述べ、次に多文化共生に関わる先行研究を整理した上で、問題の所在を提示する。ⅡからⅣでは筆者が行ったSIIYMでのフィールドワークで

得た資料を挙げ、Ⅴで考察を行う。

Ⅰ　フィールド概要、先行研究の整理、問題の所在

1　フィールド概要

麹町教会は、JR 中央線・東京メトロ丸ノ内線南北線の四ツ谷駅から徒歩 1 分の所に位置している。日曜日には英語をはじめポルトガル語やヴェトナム語など最大で六つの外国語でミサが行われている。国際色豊かな教会として知られており、様々な国籍の人々が集っている。

2017 年に麹町教会に通っていた青年（フィリピン、インドネシア、ナイジェリア、日本出身）6 人によって設立されたのが SIIYM である。SIIYM には入会／退会手続きはなく、SIIYM の活動に参加したい、共に時間を過ごしたいと思う人であればだれでも参加することができる。そのため正確な人数は把握されていないが、2022 年の夏に Messenger グループ[1)] に 250 人入り、グループ作成上限人数に達してしまった。グループに追加できていないメンバーもいるので、情報共有手段の検討が進められている。SIIYM の活動は Core leaders[2)] によってセッティングされており、その都度必要な人手を募集したり、声掛けをしたりして集めている。SIIYM 独自のイベント（Hang-out）[3)] だけでなく、麹町教会で行われる教会行事でも運営に関わっており、若者として人手を補っている。

筆者は、2019 年 5 月から麹町教会でフィールドワークを開始し、同年 6 月に SIIYM に出会った。それ以降、現在（2022 年 10 月）に至るまで毎週日曜日のフィールドワークを続け、SIIYM の一員としても活動している。SIIYM で話されている言語は、主に英語であるが、日本語やタガログ語、インドネシア語もその言語話者同士では話されている。日本語を学んでいるメンバーが多く、日本語を会話に織り交ぜている様子は頻繁にみられる。筆者は、英語を流暢に話すことができないため、英語で話しを聞き日本語で返すあるいは日本語と英語を混ぜて返している。テキストでやり取りをする場合には、英語のみというパターンも加わる。

2　先行研究の整理

（1）多文化共生の課題

総務省が2006年に出した「地域における多文化共生推進プラン」で、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくような、多文化共生の地域づくり」［総務省 2006：1］を地方公共団体に呼びかけた。これを受けて多文化共生を目指す取り組みがなされてきたが、多くの課題が残されている。竹沢泰子はその問題を五つ挙げている。① 1980年代ごろから増えた新移住者に重点が置かれ、歴史的に周縁化された集団（在日韓国朝鮮人）が軽視・排除されている。②日本語教室といった言語支援に偏っている。③「日本人」対「外国人」という二分法が支配している。④外国人住民の代表として一団体を選び、支援対象が固定化されている。⑤人種差別を罰する法律が存在しない［竹沢 2011］。

こうした課題を克服する方法として川村千鶴子は、「多文化共創社会」の実現を目指すことが課題解決の方法であるとする。この多文化共創とは、「「対話的能動性」を相互に引き出しながら、（中略）多文化共生からより広いネットワークをもつ能動的な実践力を発揮する」［川村 2016：iii］ものである。また、多文化「共生」という言葉に代わって、「共在」・「共在感覚」という言葉が人類学において使用され始めた。「共在」・「共在感覚」について木村大治は、「共にある態度、身構え」［木村 2003：ii］のことを表す言葉であるという。加えて尾添侑太は共在を「他者存在に対する認知／態度を広く開くということ」［尾添 2018：124］であるという。しかし共在は、「異質性を同質性に向けるバイアスを内部に持たないため、そこに集う人びとを保護・保障したり、精神・心理的な基盤となるまでの強い共同性を保持」［尾添 2018：127］する性質は持たないという。

多文化共生の課題を克服するかに見えた多文化共創も、日本語教育の重要性を説き、行政とエスニックコミュニティの連携といった「日本人」対「外国人」という二項対立的な見方から脱却しきれていない。また共在は、他者存在の認識の仕方を広く開かれたものにしたが、共同性や親密性のような性

質は持ち合わせていない。

（2）コンヴィヴィアリティ論

そこで本稿では、多文化共生の課題をコンヴィヴィアリティの議論によって超克することを試みる。コンヴィヴィアリティについて思想家のイヴァン・イリイチは、「現代の科学技術が管理する人々にではなく、政治的に相互に結びついていた個人に仕えるような社会」［イリイチ 2015：17-18］であり、「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由」［イリイチ 2015：40］が固有の倫理的価値をもたらすものであるとしている。これを受けレス・バックは、コンヴィヴィアリティは「親しみやすいホームのための条件を創り出すということ」［バック 2015：26］であり、これを強調することで「どのような種類の多文化状況が結果として作られているのかという問いを、我々がオープンな状態に保つことにつながる」［バック 2015：30］と述べている。また生井達也は、コンヴィヴィアリティを「「他者との直接対面的な場での共生を通じて生成される包括的な人間理解のなかで、個の実存を保証する価値が創造される状態」と定位して使用」［生井 2017：3］し、ライブハウスにおいてインディーミュージシャンらの価値創造の実践を明らかにした。

そして、松田素二はコンヴィヴィアリティ論に創造性をかけ合わせて応用した。松田によると創造性は、「問題解決のために多様で異質な次元にすでに存在している複数の思考や実践・制度を「新奇にかつ異常に結合させる」力のこと」［松田 2021：7］である。この要素として①不完全性、②集合を挙げている。①個々人は不完全であるということであり、②不完全な個的主体が不完全な他者と相互補完・重複しつながることで共同性を生成・再生成しているということ（集合性）である。この創造性にウブントゥイズム的コンヴィヴィアリティを合わせることで、恒常性（他者との紐帯、共同体の固定化・単一化）と再帰性（他者との紐帯、共同体の相対化・流動化・複数化）という相反する力を同時に実践することが可能となる。ウブントゥイズム的コンヴィヴィアリティとは、ウブントゥという「「それぞれの個人の地位によるのではなく、純粋に他者との関係を通じて」個人を定義し、理解しようと

する」［ニャムンジョ 2019：186］考え方である。この考え方をもってコンヴィヴィアリティを捉えると、自分が不完全であることを肯定的に評価でき、完全であろうとする欲望が生む「壮大な妄想を抑制すること」［ニャムンジョ 2016：333］ができる。また、自分と同様に不完全な他者（人間、自然、超越的存在など）の存在を包摂し、「対話」することを可能にする。この対話によって互いに補い合うが、それは完全になるためではない。「コンヴィヴィアリティは、異なる人々や空間、場所を架橋し互いに結びつけ」［ニャムンジョ 2016：339］、柔軟で流動的なネットワークと、より「善き生活を求め確かなものにするための革新的な方法」［ニャムンジョ 2016：339］をもたらすのである。

以上を踏まえて、本稿におけるキーワードは、「対話」である。SIIYM における実践は、不完全なもの同士が相互に補完し合っていく中で、共同性を発揮している。またこの術を応用してそれぞれの生活に活かし、不安定、孤独、困難な（異郷）生活をより善く生きようとしている。この土台となるのが「対話」であり、SIIYM の「ことば遊び」なのである。

3　問題の所在

多様な他者が共により善く生きていくことを目指している多文化共生に関連する動向を見てきたが、課題が残されていることがわかった。その課題の中でも一番大きなものは、「日本人」対「外国人」という二項対立の構図である。この二項対立の中で議論が行われているため、「日本人」、「外国人」のそれぞれの中にいる個の実態を扱うことができない。さらに、「外国人」の言語問題を解決するために日本語教室を設置するという表面的な取り組みで、「日本人」が満足してしまう。また、共在のように他者存在の認識の仕方を広く開こうとしたものも見られたが、その上で共にどのようにして生きていくかという点に関しては不十分であった。多文化共生の志向と共在という認識のあり方をかけ合わせたような捉え方が必要なのではないだろうか。

それを可能にするのがコンヴィヴィアリティなのである。自らの不完全さを肯定的に評価し、他者に対しても同様に不完全さを認めることで、「対話」

を可能にする。そして、「対話」を通してより善き生活のための方法とゆるやかなネットワークを築くことができるのである。よって、本稿ではコンヴィヴィアリティが、いかに多文化な状況を他者とより善く生きていくのかを示すのに有効であるのかを、SIIYM の「ことば遊び」という実践から具体的に考察していく。

Ⅱ 「ことば遊び」

「Hey！ Bucin！」「Thank you po」。これは SIIYM のことば遊びである。一つ目の「Hey！ Bucin！」は、「Bucin」という好きな人に夢中になっている人を指すインドネシア語を使った会話表現である。SIIYM の中で好きな人に夢中になっている人を茶化すために、インドネシア人メンバーが言い始めたのをきっかけに、その人を呼ぶときに使われるようになった。そこから派生して、恋人や好きな人がいる SIIYM メンバーがどれだけ「Bucin」であるか、「Super Bucin」や「Legend Bucin」などと形容詞を前につけてランク付けをしていた。二つ目の「Thank you po」は、相手への敬意を表すタガログ語の「po」を英語の文に取り入れたものである。文末に付けるだけで敬意を表すことができる「po」は、お手軽な敬語表現として SIIYM 内でよく使われている。日本語の場合は、「～ですか po」のようにすでに敬語表現を用いていても最後に「po」が付けられている。この会話表現は、主に神父と簡単な挨拶をするときやカジュアルな立ち話をしているときに使われている。

このようなことば遊びは SIIYM 内で頻繁に行われており、これを通して言語を習得したり、語彙を増やしたりしている。従来、このような同じ対話の中で多言語が混用されたり、切り換えられて使用されたりする状態を「コードスイッチング（code-switching）」と解釈され分析されてきている。しかし、本稿ではコードスイッチング研究[4)]が行ってきたような複数言語で構成される対話そのものを分析するのではなく、より善く対話を行うための術の一つとして「ことば遊び」を捉えるため、コードスイッチングという枠組みは用いない。以下にエピソード[5)]を三つ取りあげ、SIIYM 内で広くみられること

ば遊びを介した言語習得について扱っていく。エピソード中では、SIIYM のメンバーと共に活動をしている筆者自身を SIIYM の一員として扱うために「私」と表記し、区別している。

エピソード① 「「白米」と「白い米」」

これは夕食をとりに定食屋に行った時の、注文後のやり取りである。

この定食屋は、定食のご飯を「白米」にするか、「十五穀米」にするかを選ぶことができる。この日、私と同じテーブルにいた Jong は十五穀米を選び、Masato は白米を選んでいた。注文を終えて、Jong が「なんでヒャクマイ？」と、「白米」の読み方について聞いた。それに対して私は、「ハクマイ。ハクは白っていう漢字の別の読み方」と答えた。それに Jong は、「白い米でも同じでしょ」と言うので、私は「同じ」と返した。Jong は、「ハクマイ」と「白い米」どちらが「普通」の言い方なのかと尋ねたので、「ハクマイかな」と私は答えた。それから私が、漢字の音読み訓読みの違いを簡単に説明することになった。音読みは、その漢字の音を表していて、訓読みはその漢字の意味を表していると説明した。その例として「白」を挙げ、「例えば、「ハク」じゃ意味わからないけど、「しろ」だったら white ねってわかるでしょ」と言った。それに加えて Masato が、「漢字の後にカタカナ（平仮名）が付いたら訓読み」と言っていた。

また、Jong がカタカナで表記する際に、どの場合は「ー」を付けて、どれには「ア」「オ」なのかがわからないと言っていた。Masato も日本の中学校で英語の授業を受けた時に、英単語の読み方をカタカナでルビをふるというのが、わからなかったと話していた。特に、「Work」は、「ワーク」なのか「ワアク」なのかが難しいと言う。このカタカナ表記の話とは変わるが、Masato が「おじさん」と「おじいさん」で意味が変わるのも、よくわからなくなっていたと言っていた。

（採録日 2022 年 3 月 13 日）[6)]

このエピソードに登場する Jong と Masato は、普段から私とは日本語で会

話をしており、また日本語が不得意なSIIYMメンバーが買い物をするとき、不動産を見るときなど日本語を話せる人としてサポートしている。日本語で会話する際に、特に解決しなくても会話が成立する程度の疑問（この場合「白米」か「白い米」か）をふと気が付いたタイミングでこのエピソード①のように解決させている。ここでことば遊びは発生していないが、ことば遊びはこうした「ふとした疑問」が種になっている。

エピソード②　「盗み聞き」

日曜日の16：30ミサが終わった後に、夕食をとりに行った時のことである。隣のテーブルで、「ウィンク殺人事件」というゲームをしていた。爪楊枝を参加人数分用意し、1本だけ傷をつけ、これを引いた人が「殺人犯」となって、会話中にウィンクをする。ウィンクをされた人は、された時点で「殺された」と言わなければならない。そのゲームが盛り上がっていたので、同じテーブルにいたCrystalとJamie、私は「ウィンク殺人事件」を観察していた。すると、CrystalとJamieが隣の会話をこっそりと聞く仕草をして、これを日本語では何と言うのかと、私に尋ねた。私は、「盗み聞き（Nusumi-giki）」と答え、盗むようにこっそり聞くという意味の言葉でできていると説明した。そのあと、二人は「盗み聞き」と言いながら、耳に手を当てて聞く動作をした。

（採録日2022年2月20日）

このエピソードからは、隣の会話をこっそりと聞くというノリが先行しており、後からその行為を表す日本語を知り、行為と日本語を結びつけた状態でノリを発展させていることがわかる。先述した「ふとした疑問」が種になり、ノリを展開している例である。

エピソード③　「我が家の肉じゃが」

Renzoは度々、手料理を保存容器に入れて教会に持ってきて、メンバーにあげている。私も何度かRenzoから手料理をもらっている。Renzoから

「Sinigang」[7] というフィリピン料理を大きな保存容器でもらった時の話である。

Renzo の Sinigang は、これ以前にももらい食べたことがあった。私が Sinigang を気に入ったと伝えると、その材料の空心菜を別の日に Renzo がくれたこともあった。今回は、大きな保存容器に Sinigang を入れて持ってきて、帰り際に持たせてくれた。その Sinigang を私は帰宅してから同居家族と食べ、家族の感想を Renzo に伝えた。私と家族は、空になった容器に何かお礼に入れて返そうということになり、Renzoが以前上手く作れなかったと言っていた肉じゃがを作って入れることにした。肉じゃがを入れた保存容器のふたに、私の母が Renzo へのメッセージを添えた。

「さとままです。おいしいスープをありがとう。さむい日だったので、とてもうれしかったです。ますだ家流の肉じゃがです。食べてみてね。」

メッセージを書くにあたって、母が「日本語わかるよね」と私に尋ねたので、「そのうちわかる」と返した。Renzo は、日本語能力試験（JLPT）に向けた勉強をしながら、簡単な日本語は聞いて理解できる程度と認識していたため、日本語のメッセージでも近いうちに読めるようになるであろうと思い、あのように母に返事をした。そのため母は、平仮名多めの簡単な文章にしたのだと思う。

教会に到着し、ミサのミュージックチームの練習が始まる前に、Renzo に肉じゃがが入った紙袋ごと「はい、from my mother さとままから」と言って渡した。すると、Renzo は紙袋が重くてびっくりしていた。中の容器を取り出して、メッセージを見つけ読み上げようとした。そのうちに、Ivan と Kenny、Valerie、Seika も周りに集まってきたので、この経緯を説明した。Renzo が私の母からのメッセージを読み上げた。漢字は周りから助けてもらいながらではあったが、すべて読み上げて、ある程度理解できたようだった。

さとままです。おいしいスープをありがとう。さむい日

（「日」を「hi」と Valerie が教えた）

だったので、とてもうれしかったです。

ますだ

（「masuda ha my family name ne」と私が言った）

家流

（「masuda family style」と Seika が訳した）

の肉じゃがです。

食べてみてね。

傍線部の「食べてみて」で少し間があった。Ivan が「たべて、みるだよ」と食べる動作とその食べ物を見る動作をし、それを Renzo もまねた。Seika が「try to eat だよ」と笑いながら言ったが、「食べて、見る」で少し遊んでいた。

（採録日 2021 年 11 月 7 日）

「我が家の肉じゃが」から、日本語学習とそのサポートの過程を見ることができる。ここで日本語を学習している Renzo は、「日」という漢字の読みを「hi」、「家流」の意味を「（Masuda）family style」と教えられ都度、理解をしながら音読をしていた。最後、「食べてみてね」を食べる動作と見る動作で教えられたが、メッセージ内容を理解した上で、見る動作は Ivan が冗談を言って遊んでいるのだと理解し、その遊びを共に始めたということがわかる。その遊びを始めた二人に対して Seika が「try to eat だよ」と言ったのは、その遊びが文脈に合っていないことを訂正し、教えたいという意図ではなく、Renzo へ正しい意味を理解しているかどうかの確認を含めたそのノリに対する「ツッコミ」であると解釈することができる。

ここまで、SIIYM で行われている「ことば遊び」を介した言語習得の過程を見てきた。ここから明らかになったことは、日常の対話の中で生まれた「ふとした疑問」と、その場で即自的に生まれたノリを共有しているということが、「ことば遊び」を発生させているということだ。

Ⅲ 「ことば遊び」のプロ―Renzo

Ⅱにおいて、SIIYM 内で広くみられる言語習得の方法とそこから発生する「ことば遊び」の様子をまとめた。以降、2021 年から 2022 年にかけて日本語が上達している Renzo の発話に着目していく。Renzo は、教科書で日本語を学んだり、Seika との会話の中から習得したり、職場での耳学習もしているようだ。さまざまな方法で得た日本語を会話の中に織り交ぜながら、その場に合った「ノリ」を生み出し、自分のものにしている。ことば遊びの「プロ」として Renzo を取りあげて、時系列に沿って彼の変化を辿る。

エピソード④ 「めっちゃくった」（2021 年 8 月 15 日）

Renzo は、2021 年に入ってから日本語能力試験（JLPT）の勉強を始めており、日頃から覚えた単語（挨拶を中心に）を会話中に使っている。ある日曜日の奉仕活動後、夕食をとるため、和定食のお店に入った。カウンター席に、Seika、Renzo、私の順に座った。注文を済ませ、料理が来るのを待っている間のことである。

Renzo は度々、Seika に日本語の単語の意味を英語で解説してもらっている。この時も、「定食」とはどういう意味なのか、「定」と「食」それぞれどういう意味の漢字なのかを聞いていた。Seika はまず「定食」は「set lunch」と説明をした。それに対して、Renzo がファストフードのセットと同じかと聞いたが、Seika と私はそれにニュアンスの違いを感じ、「定食」は日本食のセットで、ご飯とスープ、野菜の何かとメインがセットになっているものという説明を加えた。それから Seika は、「定」を決められたもの、「食」は食べるという意味だと説明をした。関連して「給食」の意味も Renzo に尋ねられ、「school lunch」という意味で、「給」は serve、「食」は「定食」と同じ食べるという意味だと解説した。

Renzo が「定食」を理解した後、同僚に教えてもらったという日本語の話を始めた。それは、「めっちゃくった」という言葉だった。Renzo はこの

言葉を満腹の状態で言ってみたいのだという。予想外の言葉にSeikaと私は、返答せず笑っていた。すると、Renzoは言葉の使い方や発音を間違っているのではないかと不安になり、Seikaに意味と発音を確認した。その後、Seikaと私は、「めっちゃくった」という言葉のイメージをRenzoに伝えた。例えば、「高校生くらいの子が部活終わりに山盛りご飯食べて言ってる感じ」、「野球部っぽい」などと話した。これをRenzoは、ご飯お替り無料だからたくさん食べると言った。Renzoはご飯を2.5杯食べていた。食事を終え、食後の歌[8]を歌った後、Renzoは「めっちゃくった」と言って満足そうにしていた。

この日からしばらくの間、Renzoから「めっちゃくった」は聞かなくなった。しかし、約2か月後、同じお店に日曜日のミサ奉仕の後、夕食に行ったとき食後に「めっちゃくった」と言っていた。

エピソード④からは、まずRenzoがその場にあるものから語彙を広げていこうとする姿勢と、それに応じる側（Seika）がどのようにそのものの解説を行っているのか、それをRenzoがどのように吸収しているのかがわかる。Renzoはこれまでも「定食」を食べたことはあり、主菜を選ぶとご飯とみそ汁がついてくるものというものは知っていた。ここで改めて「定食」の意味、その漢字の意味を聞くことによって、それに関連して「給食」の意味まで理解できるようになった。

その後、「めっちゃくった」とRenzoが言ってSeikaと私が笑う。Renzoはその笑いを誤って発音したことに対する反応だと思い、Seikaに意味と発音を確認する。正しかったことがわかってから、Renzoは「めっちゃくった」にふさわしい満腹状態になるようご飯を食べ、「めっちゃくった」と言う。

エピソード⑤ 「おじゃまします」（2021年10月）

クリスマスソングアルバム[9]収録予定だった、“Bituin”というフィリピンの聖歌隊グループ（Bukas Palad）が作った曲から発生したノリ「おじゃまします」についてである。

この曲は、「星」という意味のクリスマスソングで、原曲はオーケストラで演奏されている。メロディーをさまざまな楽器が交代しながら演奏していく編成になっている。原曲を聴いたSeikaとRenzoが、各楽器が「おじゃまします」と言いながらメロディーを演奏しているように聴こえるという話をミュージックチームのメンバーに共有した。それから、「おじゃまします」をその曲のノリで言う遊びが流行っている。例えば、食事の席につくときの「おじゃまします」や、何かものを取るときの「おじゃまします」が、“Bituin”の「おじゃまします」を連想して使われている。

エピソード⑤では、「おじゃまします」という言葉が、通常使われる場合よりも強調された形で使われている。普段は席に着くとき、ものを取るときには「おじゃまします」とは言わないし、英語でもそういった表現を言うことはない。“Bituin”の曲調に合わせて「おじゃまします」を多用することで、「おじゃまします」を使い得るシチュエーションを覚えている。そして、この時“Bituin”のカバーに携わっていた者の間で「ノリ」が共有され、「ことば遊び」が発生している。

エピソード⑥ 「Renzoの日本語」（2022年2月20日）

Renzoは、2021年秋頃から、会話に日本語を混ぜたり、Seikaに教えられながら日本語でのコミュニケーションを図ったりしている。誤った日本語を使ったり、受け手が解釈を加えることで理解することができる日本語を使ったりしながら、徐々に日本語の語彙を増やしている。ここで、そのやり取りの例を挙げる。

ｉ「ただいま」

Renzoが103（部屋番号）[10] 戻ってきた時、「かえります」と言って入ってきた。Seikaが「かえります？」と聞き返し、「ちゃうで、ただいま」と修正した。Renzoが「ただいま」と言い直し、Seikaと私で「おかえり」と返した。Seikaが私に、いつもRenzoに「ただいま」と言うと、「ただいま」と返されると話していた。

ⅱ「よっしゃあ」

Jody 神父が 103 にカップケーキを作って差し入れしてくれた時のことである。Seika がそのカップケーキを食べる前に、「いただきますの歌」[11] を歌い始めた。それに Renzo も大きな声で参加していた（以前は日本語の歌詞に自信がなく小声だった）。歌い終わった時に Renzo が、「よっしゃあ」と片手拳を挙げて言った。Seika は、Renzo が何と言ったのか聞き取れず、聞き返していたので私が、「よっしゃあって言った」と言った。Renzo が突然「よっしゃあ」と言ったのが面白く、その場にいた人たちは笑っていた。私が「わんぱくすぎる」と言うと、Jody 神父がうなずきながら笑っていた。Renzo が、「わんぱく」はどういう意味なのかと聞いたので、私は「こどもっぽい」、Jody 神父が「childish」と答えた。

ⅲ「美味しかったね」

Jody 神父がタコスを作ってきてくれた。それを Hangout（2022 年 2 月）終わりに残っていた人たちで食べた。私が食べているところを見て Renzo が「おいしかったね」と言ったので、私は、「おいしい。でもまだ Renzo 食べてないでしょ？」と返した。すると、Seika が Renzo に耳打ちをして、「さとの表情見てました」と Renzo が言った。私が美味しそうにタコスを食べていたので、その表情を「美味しかったね」と表現したようだ。

ⅳ「関西弁」

ⅲと同じ時のことである。Renzo がタコスを食べはじめて、とても美味しいということを日本語で言う練習をしていた。大阪出身で関西弁話者である Seika が「めっちゃ美味しい」と関西弁のイントネーションで教えた。それを Renzo が真似して言おうとした時、その場にいた Ivan と Kenny、Valerie から、「それは関西弁」、「めっちゃ関西弁だよ」と指摘されていた。

ⅴ「気持ちいい」

16：30 ミサの聖歌を練習している時、closing song の楽譜が 16 枚に分かれているもので、譜めくりが大変な曲だった。私は、楽譜をトリミングし必要な箇所だけを集め加工し、楽譜を 2 枚にしていた。それを練習の時、他のメンバーに共有した。それを見た Renzo が、「さとは、頭がいい」と

言ったので、私はふざけて「でしょ」と返した。するとRenzoが、自分が話した日本語に日本語でリアクションが返ってきて、「気持ちいい」「嬉しい」と言って喜んでいた。

エピソード⑥は、日常的にRenzoが日本語の語彙を習得し、発話を試みている場面であった。ⅰからⅲは、Renzoが覚えた日本語をコミュニケーションの中で使っている。日本語として「正しい」ものではない場合は、Seikaや私など周囲にいる人が意味を解釈することでコミュニケーションが成立している。特に、ⅰでSeikaが「ちゃうで、ただいま」と修正しているところや、ⅲでRenzoの「美味しかったね」の補足をSeikaがRenzoに耳打ちをして、「さとの表情見てました」という場面は、それを聞いた人の解釈がよく働いている。Renzoはこのようなコミュニケーションを繰り返しながら、日本語を習得していき、ⅴ「気持ちいい」にある気持ちよさ、嬉しさにつながっていった。Renzoの日本語に対して、私が日本語で答えるということは頻繁にあるが、ⅴのやり取りで気持ちよさを感じたのは、Renzoが意図していたようなやり取りが日本語でできたという点にあったのだろう。

エピソード⑦ 「お土産」（2022年7月24日）

SeikaとRenzoが四国旅行に行った。そのお土産を渡してくれた時のこと。少し早めに16：30ミサの音楽練習の部屋に向かったところ、すでに部屋の鍵が開いていてSeikaとRenzoがいた。Renzoが改まった態度で、私を呼んだ。そして、「さとさん！つまらないものですが、どうぞ！」と大きな声で言い、お土産をくれた。それに対して私は「ありがとうございます。頂戴します」と言って受け取った。その様子をSeikaが動画に撮っていた。SeikaもRenzoが「応援団」のような発声で言ったのが面白く笑っていた。Renzoは私が部屋に来るまでの間、Seikaとお土産を日本語で渡す練習をしていたらしい。

エピソード⑦の頃（2022年夏）になると、Renzoの日本語はさらに上達し

ていった。たびたび、Seika と Renzo の日本語の上手さに驚いたという話をするまでになっていた。特に、相槌とリアクションが上達しており、「ああ、そうね」「なんで？」「さすが」はナチュラルに使いこなしていた。また、Seika に言いたいことを日本語にしてもらい、それを言うということも上達し、さらにエピソード⑦の「応援団」のようなキャラクターを添えた形で話すようになった。さらに、このエピソードの特徴的な点は「つまらないものですが」という謙遜の表現を使いこなしているところである。Renzo は、この「つまらないものですが」という言葉をそれ以前に Seika から聞いていた。Seika が目上の人に対して贈り物をする際に、「つまらないものですが」と言っていたのを覚えていた。それから「つまらないものですが」という表現は、日本人が贈り物をするときに言う言葉であると Seika から教えられ、言葉と使い方を理解していた。Renzo は、「つまらないものですが」という日本人的な贈り物の仕方を、私にお土産を渡すという機会に実践したのだ。

「ことば遊び」のプロとして Renzo のエピソードを扱ってきた。Renzo が日々の対話の中で語彙を増やしながら、ユーモアとその場のノリを合わせて「ことば遊び」を駆使していた。ここで明らかになったのは、Renzo を中心にその場を共有している人々が、対話を通して互いの情報や新しい語彙を交換しているということ、その情報をもとに即時的なノリを生み出し共有しているということである。それが積み重ねられることによって、Renzo の語彙と表現が豊かになっていったということである。

Ⅳ　Language Cafe

2022 年 4 月から、コアグループに「Warmth」[12] いうものができた。この Warmth の立ち上げを発案した A さんから、SIIYM で Language クラスをやりたいという案が出された。これは、互いに言語（日／英語に限らず）を学び合う機会・仕組みをつくり、学び合いを通して、互いの仲をより深めるというものである。学びたい言語のネイティブをパートナーにし、ペアで教え合い、言語学習以外の場面での助け合いを期待していた。この案を現 SIIYM

代表・副代表（2020-2022）が練り直し、実験的に実施可能な形にした。その初回が、2022 年 2 月 17 日に行われた。

この企画は、「Language Cafe」と名付けられ、毎週木曜日の 21 時から Zoom で行われた。「Cafe」には、毎週水曜日 21 時から行われているカテキズムよりもカジュアルに、リラックスした雰囲気で行いたいという意味を持たせている。A さんの草案では、固定したパートナーと学びあっていく[13] いうものだったが、Language Cafe は以下のような方法で行われている。まず、実験段階のため、広く SIIYM 全体へ広報はせず、A さんと代表・副代表が関心のありそうなメンバーに個別に連絡を送り、参加者を募った。開催時刻に Zoom に集まると、この会の流れについての説明が代表から行われた。この会は英語パートと日本語パートの 2 部構成になっており、それぞれのパートに全体での自己紹介とペアセッションが組み込まれている。ペアセッションでは、英語話者と日本語話者がペアになり、英語パートでは英語話者が、日本語パートでは日本語話者が先生となり、ペアをフォローし、与えられたテーマについて対話する。この会で重要視されているのは、「先生」はゆっくり話をし、相手が少しでも多く話せるように時間を作るということ、「生徒」は恐れず母語を交えながらでもたくさん話すということである。

初回の Language Cafe 後には、フィードバックの時間が設けられ、改善点や感想を話し合った。初回は、趣旨説明に時間を割いてしまったため、全体的に時間が押してしまったが、ペアセッションの時間（15 分間）に関してちょうどよかったという声が多かった。提案として、Kyo が会のはじめのお祈りをなくして、信仰に拘わらずより多くの人が参加できるようなカジュアルな会にしたいと言った。この Language Cafe を通して、SIIYM の新たな人とのつながりをつくりたいという Kyo の意見に他の参加者も同意し、次回からお祈りをなしにし、信仰関係なく、「英語を話してみたい」、「日本語を話してみたい」という人に声をかけていこうということになった。この会の後には、Messenger に「Language Cafe」というグループが作られ、今後の会の情報共有や、新たな人の追加ができるベースを作成した。

これ以降、セッションがすべて終わってから、次週のファシリテーターを

二人（日／英担当）決め、ファシリテーターが自己紹介の質問とセッションテーマを考えることになった。ファシリテーターたちがテーマを決めると、Messenger グループに次回のテーマと参加者の募集を始める。参加希望者は、希望者リストをコピーアンドペーストする形で自分の名前を追記し、メッセージを送る。メッセージを送った後に参加できなくなってしまった場合は、同じようにリストをコピーアンドペーストして自分の名前を消すだけでよい。

Messenger グループの「Language Cafe」には、麹町教会で日曜日出会った人や職場の人、学生時代の仲間など、信仰にかかわらず日本語、英語のコミュニケーションに関心のある人たちが集まるようになっていった。中には、Language Cafe での集まりを通して、麹町教会に来るようになった非カトリック信者もいる。

ここで、セッションの様子を一部紹介する。

エピソード⑧ 「Language Cafe　2022 年 6 月 30 日回」

2022 年 6 月 30 日の Language Cafe の日本語セッションで Renzo と B さんと同じグループになった。この日の日本語セッションのテーマは、「スマホとインターネットがなかったら 1 日をどう過ごしますか？」だった。テーマについて説明されたとき、「たった 1 日ないくらいなら平気だ」という声があがり、期間を 1 週間に設定し直してセッションがスタートした。セッションがはじまり、「Hello」「こんばんは」と挨拶を交わしたあと、Renzo が「B さんは？スマートフォンとインターネットがなくなったら、何をしますか？」と尋ねた。B さんは、インターネットがなくなると、仕事もインドにいる家族との電話もできなくなるため、「大きい休みの時間」ができると答えていた。B さんが「大きい休みの時間」と表現したことに対して、Renzo が「大きい時間？ How I say long time？」と聞いたので私が、「だから長い時間、大きいより長い時間」と答えた。また B さんが「休み＝rest」で合っているかを尋ね、Renzo が「休み is rest」と答えた。それから B さんが日本語の教科書を画面に映して、この本を「長い休みの時間」に読みたいと言った。これに対して、Renzo が最後にその本を読ん

だのはいつかと聞いた。その後、以下のようなやり取りをした。

Bさん）なんか1年、1年前。

Renzo）1年前？

Bさん）2021（にせんにいち）。ごめんなさい。

Renzo）去年ね。

Bさん）去年なんかこのページは新しい。なんかこの日本語は全然。

Renzo）『みんなの日本語』ね。

Bさん）読みたい。

Renzo）大丈夫大丈夫。Renzoも。

私）Renzoも？

Renzo）Renzoも同じ。いつも日本の本は私のカバンを入れてる。でも使えない。

1年前からBさんが日本語の教科書を開いておらず、勉強していないことを「ごめんなさい」と言ったが、RenzoもBさんと同じようにいつも教科書を持ち歩いているが、読んでいないと言った。

その後、私がテーマについて答え、Renzoの番が回ってきた。Renzoは、「Renzoは、うーんなんだろ。ええ、Renzoインターネット、スマートフォンでめっちゃ important。でもなくなったら、あの、自転車を乗ります。そう。と、Ah、家で部屋を掃除します。そう。たぶん、最初は家を、家の部屋を掃除します。そしたら、Ah、料理をつくった、つくる。作る。と、自転、あ、外で自転車を乗ります。たぶんギターをやります？弾いて」

と答えた。ここで、ギターを演奏するということをどのように表現するかの確認が行われた。

Bさん）ひき、弾きます。

Renzo）弾きます？

Bさん）さと、何の言葉がいい？ギターを弾きます。

私）ギターは、ギターを弾きます。ギターを弾きたい。

Renzo）ギターを弾きます。

エピソード⑧は、日本語セッションの様子であった。セッション中その言語の先生役の人は、相手の疑問に答えたり、つまずきをサポートしたりする。エピソード⑧中では、「ギターを弾く」という表現について、Renzo も B さんも正しく用いられていたが、「さと、何の言葉がいい？」と確認されたので答えている。また、B さんが「休み」は「rest」と言う意味で合っているかについて、先生役である私が答えるところを Renzo が「休み is rest」と答えている。このように、一応そのセッションの言語を得意とする人が「先生役」としているが、役割が固定されているわけではなく、コミュニケーションを通してその時、速やかに応えられる人がサポートしている。

基本的には、日本語と英語のセッションが行われてきたが、一時期その他の言語も学べるよう先生役を募集していたことがあった。

エピソード⑨ 「Language Cafe 活用法」

2022 年 5 月頃、Language Cafe で日本語と英語以外の言語も学べるような場をつくろうと試みられていた時期があった。参加者の母国語が、その他の言語として選択できるようになり、教える側としてボランティアしてくれる参加者がいる場合のみ行われた。この時期、選択できたのは、タガログ語とイタリア語だった。タガログ語の先生として積極的にボランティアをしていたのが Mariel だった。Mariel が積極的に Language Cafe に参加し、日本語を学んだり、タガログ語を教えたりしようとしている姿をみて、Seika は、タガログ語を Mariel から学ぼうと思った。Seika は、もともとタガログ語を学びたいと思っており、普段の会話の中で SIIYM メンバーからタガログ語を教わっていた。

Mariel と Seika のタガログ語セッションは、会話をベースにその都度その単語の意味を英語で教えてもらうという方法だった。Mariel が「今日は何食べたの？」「作ったの？」とタガログ語で Seika に聞き、英語でなんと言っていたのかを教えてもらう。その後、その文に出てきた単語の意味を教わり、Seika が言いたいことをタガログ語でなんと言うのかを英語で聞いて、教えてもらう。そのため、文法やタガログ語の仕組みについて教え

てもらうという形ではない。しかし、Seikaはこのようなタガログ語セッションや他で教えてもらったタガログ語の語彙を積み重ねて、段々とタガログ語の仕組みがわかってきたと話す。

エピソード⑨のような形でタガログ語を習得していったSeikaは、覚えたタガログ語を「披露」することによって、初対面のフィリピン人と話す時に役立てている。Seikaの鉄板フレーズは、「Magandang hapon. Ako magandang Hapon.」（こんにちは。私は美しい日本人です。）と「Talagang talaga sarap ang Leche Flan na niluto ko. Henyo ako！」（私が作るLeche Flanはめちゃくちゃ美味しいです。私天才！）で、「喜ばれる話のネタ」として披露しており、初対面の人との会話を和やかなものにし、また習得した語彙を活用する機会にもしている。Seikaはタガログ語を聞いた時のリアクションも楽しみにしているという。Language Cafeを通して、新たな語彙を獲得していくだけでなく、日常生活の中で習得した語彙を自分の言葉として使う練習も行われ、さらにそれが日常生活の場でのコミュニケーションにも役立てられている。

Language Cafeでの対話は、ⅡとⅢで扱ってきた対話の在り方とは違う側面を持っているということがわかった。その側面とは、互いに言語能力が不十分であるということを認めあった上で、「楽しみ」ながら日本語／英語を話してみるという対話の場を人工的につくりあげているというところである。こうした場が提供されることによって、日常的な対話の中で習得してきた語彙を自分の言葉として使う機会となる。さらに、間違えたとしても「先生」が教えてくれるという安心感がある。

Ⅴ　考察

1　「ことば遊び」という実践

ⅡからⅣにかけて、SIIYMの「ことば遊び」の実践をエピソードと共にみてきた。まずエピソードをもとに「ことば遊び」という実践がどういったも

のであったか記述していく。どの「ことば遊び」も日常的な対話の中で行われている。例えばエピソード②「盗み聞き」は夕食時の対話の中で、たまたま隣のテーブルにいたメンバーたちがウィンク殺人事件をして遊んでいた頃、自分たちの話題が途切れたところで始まった、こっそり聞く仕草に「盗み聞き」という Crystal と Jamie にとって新しい語彙が加えられたことで起こった。そしてエピソード④「めっちゃくった」では、Renzo が新しく得た「めっちゃくった」という語彙をそれに合った状況で使いたいというところから始まっている。そこに、Seika と私によって「めっちゃくった」という言葉から連想されるイメージ（部活終わりに山盛りご飯食べてから言っていそう）が加わり、そのイメージを体現させるかのように振る舞い、食後に「めっちゃくった」という準備をしている。「めっちゃくった」という言葉自体は、食後であれば特別満腹な状態でなくても言うことができるが、あえてより「めっちゃくった」にしようとしているところに面白さがある。Seika と私は、Renzo の口から「めっちゃくった」という言葉が出てきたという意外性から笑っているだけでなく、その後の Renzo の振る舞い（ご飯をお替りして食べている様子）も含めて面白さになっている。

このように、日常的な対話の中である新しい言葉が簡潔にその状況や動作を言い表している、あるいは状況や動作を的確に表現する言葉が見つかった時に、「ことば遊び」へと発展していく。Ⅱ冒頭で紹介した「Bucin」はこの説明を裏付ける好例である。インドネシア語の「Bucin」という言葉を多くの SIIYM メンバーは知らなかったが、恋をしている人を茶化すのに最も端的でかつ新鮮だったためよく使われた。さらに Super や Legend と形容詞を前につけて「Bucin」ランキングを考えるという独自の展開も起きた。また、エピソード③「我が家の肉じゃが」での「たべてみる」は、「ことば遊び」を展開させていく過程で、それをその場で共有された「ノリ」として本人たちが自覚し、あえてそのノリを強調していた。「Thank you po」もその例ということができる。

「ことば遊び」を介してみてきた SIIYM の対話は、「正しい」日本語／英語のやり取りを求めたものではなかった。その場を共にしている人たちと対話

をするのに、自分が用いることができる方法（語彙のレベル、言語・身体表現）を駆使して伝え、受け取った相手はその意図を解釈し応答している。受け取る側の不十分さについてここで補足を加えておく。相手の発話に対して、意図を汲み解釈し応答する受け手（例えば、エピソード③の Seika と私）は、一見すると、不十分さをカバーすることができる「不十分ではない者」である。しかし、受け手は自らが行った解釈がどれだけ的を射ているかは、相手と対話を続けていかなければ確かめることができないという点において不十分である。伝える側は言語運用の面で不十分さを持ち、受けとる側は意図の汲み取り、解釈の面で不十分さを持っているのである。つまり、互いの不十分さを認めつつ、相手に歩み寄り、補い合うことによって対話を成立させており、その手段の一つとして「ことば遊び」をしている。こうした対話を積み重ねていくことで、相手の語彙や趣味、性格といった情報、共有している場や話題が増えていき、「ことば遊び」が発生するようなノリが共有しやすくなっていくのである。

その一方で、Language Cafe は上述してきたような対話の積み重ねを同じ人同士で行いにくい環境である。しかし、Language Cafe は互いに不十分であることが前提とされた上で「楽しみながら」コミュニケーションを行う機会である。対話の相手と使用言語、対話テーマを指定し、一定時間セッションを行う中で、その言語を学んでいる側は自分が持っている語彙を尽くして伝え、その言語を得意とする受け手は相手に歩み寄り、自分で解釈を加えながら理解していく。これを、言語を変えて双方向で行うことによって両方の立場に立つことになる。そのため、Language Cafe に参加している全員が、伝える上での不十分さを自覚しながら、相手にその不足を補ってもらうという体験をしている。これを共有しているということが、正しい言葉遣いでなくてはならないということから解放し、楽しみながら得意ではない言語を使用しながら対話をすることができるという安心感につながっている。また、不十分であると思いながら対話をしているため、自分が話していることを相手に理解してもらえていることがわかった時には自信を得られる。エピソード⑧「Language Cafe　2022 年 6 月 30 日回」のセッションの中で、その場面

に筆者は立ち会った。Bさんがこの回の日本語のテーマである「スマートフォンとインターネットが1週間なくなったら何をするか」に答えていた時である。一通りBさんが日本語で話をした後、「なんかわかる？わかる。私の日本語私だけわかる」と言ったので、筆者が「私もわかったよ」と言うと「ああ、ありがとう」とBさんが返し、Renzoが「私ちょっとわかった」と答えた。このやり取りを経て、Bさんは自分が話す日本語が筆者とRenzoに伝わっているという安心感を得てその後もセッションを続けている。

「ことば遊び」のこのような傾向性は、ジョン・サールの言語行為論からは、どのように捉えることができるだろうか。サールは、「意味し得ることはいかなることも述べることが可能である」という「表現可能性の原理」が言語行為を論じる上で重要であると述べる［サール 1986：32］。そしてその「意味」に関して、「話し手の発話意味（speaker's utterance meaning）は、さまざまな仕方で言葉どおりの文意味から逸脱しうる」［サール 2006：192］ため、言葉通りの意味ではなく、話し手や言葉を発せられた行為に帰属させなければならないという。話し手は、有意味であればあらゆる言葉を発することができるが、これには「慣習の範囲内において」という条件がある。これらを踏まえると、「ことば遊び」という実践の意味を以下のように整理することができる。「ことば遊び」は、その場で即時的に発生するノリ[14]である。しかし同時にそこには、それ以前の対話の蓄積という土壌があるといえる。この土壌には、その場を共有している人々の情報、共通の話題、共に「ことば遊び」をしたという経験が含まれている。これが「慣習」的に働き、ノリを説明せずとも共有することができるようになる。その上で、発せられた言葉がいかなる意味を持つのか、聞き手は、その場の状況とその発話行為、発話者について持ち合わせている情報に帰属させ、意味を理解するのである。つまり、「ことば遊び」が成立するだけの共同性が重要性を帯びてくる。では、そのような共同性とは、いかなる特性を持っているのであろうか。次に、コンヴィヴィアルな能力として「ことば遊び」を見ることによって、考察を深めていく。

2　コンヴィヴィアルな能力としての「ことば遊び」

この節では、SIIYMの「ことば遊び」を「コンヴィヴィアルな能力」［バック 2015：7］として考えていきたい。まず、「コンヴィヴィアルな能力」とはバックがシャムザ・シンハとともに、ロンドンの若い移民を対象に調査した結果、見出したものである。バックによると、ロンドンの若い移民らは「差異を伴い、差異を通じて機能するような連携を築」き、「新たな文化的混合の形式と社会的つながりを形成している」という［バック 2015：6］。そのために彼らが発揮しているのが、「コンヴィヴィアルな能力」である。これは彼らがロンドンという多文化を有する世界的都市を生きるために用いている能力なのだ。多くのSIIYMメンバーにとって、日本という国は異文化の地であり、麹町教会は多文化な場である。SIIYMのメンバーは、日常生活を送る上でも麹町教会で活動をする中でも他者との違いを感じ、また他者に違いを感じられてもいる。そうしたあらゆる差異の中で、「より善く」生活していくための工夫を凝らし、術を身に付けていく。その術の一つとして「ことば遊び」というコンヴィヴィアルな能力を有しているということができる。

「ことば遊び」というコンヴィヴィアルな能力は、ウブントゥ的コンヴィヴィアリティの不完全な者同士が「対話」を通して、個人を理解しようとし、そして補い合うという要素を持つ。さらに「楽しむ」という要素も大きく働いている。そもそもコンヴィヴィアルとはスペイン語で「節度ある楽しみ」という意味を持っている。この「節度ある」というのは、「人格的な結びつきから気をそらせたり、それに対して破壊的であったりする楽しみだけを排除するような徳性」［イリイチ 2015：19］である。この「節度ある楽しみ」を活用して生井は、「現代社会の新たな価値の創造と生きられる場の循環を促す装置としての「楽しさ」という情動的側面」［生井 2022：19］を探究し、遠藤英樹は「一人一人多様で雑多な価値観を持」ちつつ、楽しさを通して構築される「陽気で暖かみのある「人間的な相互依存」関係」について研究を行った［遠藤 2008：17］。以上を踏まえて、SIIYMの「ことば遊び」における「節度ある楽しみ」とは、互いの差異を認め合いながら自分の持てる手段を尽くして対話を行う。その中に、即時的なその場のノリを組みあわせて楽

しんでいるということができる。このような「ことば遊び」というコンヴィヴィアルな能力は、松田による集合的創造性の発揮ともいうことができる。互いの差異や不完全さを認め合いながら、「ことば遊び」を介して人々が結びつき、SIIYM を形成しているのである。つまり、「ことば遊び」という集合的創造性を駆使し、SIIYM の共同性の発揮を支えているのだ。

おわりに

本稿では、麹町教会の SIIYM のメンバーが行っている「ことば遊び」を通して、補い合いの関係性を築き共同性を発揮する土台を形成している姿を描き、それを「コンヴィヴィアルな能力」として捉え、考察を行ってきた。最後に、SIIYM の「ことば遊び」の実践が多文化共生の課題を解決するということについて述べ、論文のまとめとしたい。

筆者は多文化共生の課題として、日本語教育の重要性を解き日本語教室の設置をゴールとしている点、「日本人」対「外国人」という二項対立的な見方から脱却できておらず、「日本人」が「上から」手を差し伸べる形になっているという点を指摘した。コンヴィヴィアルな能力である「ことば遊び」はこの 2 点を克服することができると考えられる。日本語教育に重きを置いているという点に関しては、日本語話者でない人々を一つの集合体として扱い、日本語を教育すれば、日本において言語の壁は突破できるというところに問題があるのではないか。SIIYM の「ことば遊び」という実践は、その場に居合わせた個と個が互いの違いを認めながらもより善く対話を行おうとするものであった。言語の壁を突破するためには、日本語教室によって語彙や知識を与えるだけでなく、生活の場での「ことば遊び」な対話が必要なのではないだろうか。このような個と個の対話が活性化してゆけば、「日本人」対「外国人」という二項対立の構図も実社会の側から取り払うことができるのではないだろうか。

注

1） Messenger とは、Facebook のチャット機能である。複数人でチャットを行うグループの作成ができる。SIIYM での情報共有は Messenger のグループで行われている。

2） SIIYM の幹部のような存在である。任期は 2 年で、SIIYM メンバーからの投票によってリーダーたちが決まる。代表と副代表を中心に Core groups が六つありそれぞれにリーダーが配置されている。

3） SIIYM で月末に行われているイベントの名称。テーマに沿った講演を聞いたり、グループで互いの考えや経験をシェアしたりする会。このイベントを通して、SIIYM で活動し始める人も多く、新しいメンバーと出会う機会となっている。

4） コードスイッチング研究に関しては、田崎敦子（2006）が「コードスイッチング研究の概観―多言語社会のコミュニケーション分析に向けて―」にて概観している。

5） 登場するメンバーは和名を持っていてもアルファベット（ローマ字）で表記している。メンバーについては、「登場人物一覧」を参照。

6） 採録日の表記について
エピソード末に（　）付きで採録日が書かれている場合は、日付が定まっているものである。Ⅲのエピソードでは、Renzo の変化を時系列で辿るというため、エピソードのタイトル横に採録日を記している。採録日が書かれていないエピソードは、特定の日の出来事ではないため記入していない。

7） タマリンドを使った酸味のあるフィリピンのスープ料理。

8） 歌詞：「この食事をどうもありがとう。讃えよう、神様の愛をいつまでも。ごちそうさまでした。」
「いつまでも」で十字を描き、「ごちそうさまでした」で手を合わせる。日本の日曜学校で歌われている歌を SIIYM の食前後のお祈りとしている。
食前の歌の歌詞：「この食事をどうもありがとう。受けよう、体と心に神様のあいただきます（「愛」と「いただきます」が重なる）」

9） 2021 年のクリスマスに向けて、Kenny が中心となって SIIYM のオリジナルアルバムを作成した。オリジナルソング 2 曲、カバー曲 2 曲、オリジナルカバー1 曲で、オリジナルソングの「Dancing With The Bells」は SIIYM の多くのメンバーが参加した。音楽配信のサブスクリプションサービスで配信されている。

10） 麹町教会内にある部屋の番号。毎週日曜日は SIIYM が使用している。ミサ前後にはこの部屋に集まっている。

11） 注 8 参照。

12） これは、以前は「Translation」という、翻訳作業や通訳を通して新しいメンバーのサポートをするグループだった。通訳含め、新しいメンバーを「Welcome」する窓口となるような役

割を期待され、Warmth というグループに改められた。

13) バディを作り、互いに言語学習をサポートしあうだけでなく、相手を知り日常生活の助け合いまで行えるような関係を作ることを理想としていた。

14) 本稿において「ノリ」を、①ことば遊びが発生していく中で発展していくもの、②すでにその場に生じているものがことば遊びと組み合わさっていくもの、③ことば遊び自体を指すものが一様に表現されている。「ノリ」について、精緻な使い分けを行うことが、ことば遊びの詳細な分析に貢献すると予想される。今後の課題としたい。

登場人物一覧

名前	（一段落目）プロフィール （二段落目）「私」から見た人物像
Crystal	インドネシア出身。高校卒業後、来日し 1 年間日本語学校に通う。その後、4 年制大学に進学し 2022 年 9 月に卒業。日本で就職が決まり、働き始めた。2022 年 4 月から SIIYM の代表を務めている。 真面目で周りによく気を配り、面倒見が良い印象だが、茶目っ気もありみんなの妹のようにかわいがられている。
A さん	秋田県出身。大学進学をきっかけに上京。麹町教会の広報に携わっている。写真撮影が得意で、よく SIIYM メンバーの様子を撮影している。自宅にメンバーを招き、手作りプリンをふるまい談笑する「Café Chiara」を企画し実施していた。 おもてなしの精神が旺盛で、みんなのケアをしようと動いてくれている。新しいメンバーに積極的に声をかけたり、翻訳／通訳のサポートをしたりしている。
Ivan	インドネシア出身。大学進学を機に来日。卒業後、就職のため上京。ミサやイベントなどでギターを演奏しており、2022 年 4 月からミュージックチームのリーダーをしている。 適当なことを言うこともあるが、真面目でミュージックチームメンバーのことをよく考えている。Seika と私によくいじられている。
Jamie	フィリピン出身。子供向け英会話教室の先生、先生のトレーナーをしている。その他にも、オンラインショップの経営や実家の Airbnb 経営サポートも行っている。歌が上手でミュージックチームとしてミサで歌っている。 明るくてフランクに接してくれる。かわいらしくお茶目なところもあるが、みんなを見守るお姉さんなところもある。

Fr. Jody	フィリピン出身。イエズス会日本管区の神父。日本に住む若者の信仰を深めること、神父を志す青年の養成を担当している。 2021 年冬頃から、接点が多くなった。手料理を大量に作って SIIYM に差し入れてくれる。Jody 神父に相談をしているメンバーも多いようで、頼られている印象。
Jong	フィリピン出身。結婚していて娘が一人いる。SIIYM 創設メンバー。ミサのライブ配信がはじまった頃よくサポートしていた。ミサで歌を歌っていた時期もある。 料理が上手で作ったものを持ってきたり、自宅に招いたりして振る舞っている。みんなから「Kuya」「パパ」と呼ばれており、頼りにされている。
Kenny	インドネシア出身。国費留学生として来日し、日本語学校、専門学校を卒業し、2022 年 4 月から 4 年制大学の 3 年生として編入した。編入を機に京都に引っ越した。クラリネット、サックス、ピアノ、ギターの演奏ができるだけでなく、作曲編曲もできる。 普段は静かに、冷静にしているが、欲しい楽器の話をするときはテンションが上がる。勉強熱心で真面目。
Kyo	フィリピンと日本にルーツを持つ。SIIYM の設立メンバーであり、初代代表だった。子供向けの英会話教室の先生、先生のトレーナーをしている。 SIIYM の自分の家族としてとても大事にしている。みんなを率いる力に長けている。冗談を言ったり、いたずらをしたりすることも好き。
Mariel	フィリピン出身。2022 年 4 月から Promotion のリーダーをしている。Language Café の中心メンバーをしている。 実はしっかり二人で話をしたことはないが、グループシェアで同じグループになったことが数回ある。新しい人が来ると積極的に話しかけに行っている。
Masato	フィリピンと日本にルーツを持つ。2020－2022 年の SIIYM 副代表だった。2022 年 4 月からは Logistics のリーダーをしている。16：30 ミサの Ushers をまとめている。 とても恥ずかしがり屋で、人前で何かをするということはあまりしない。きっちりしていてイベントの準備や片付けが滞りなく進むように動いてくれる。
Renzo	フィリピン出身。子供向けの英会話教室の先生をしている。2020－2022 年のミュージックチームリーダー、2022 年 4 月から SIIIYM の副代表をしている。ギターと歌、ダンスが得意。 いつもみんなを楽しませてくれ、ユーモアが溢れている。私が爆笑すると喜んでくれる。みんなのケアを良くしてくれていて、真面目なところもある。

B さん	インド出身。2019 年に仕事で来日。2022 年 4 月から Liturgy のリーダーをしている。PC 関係が得意で、ミサの配信にも関わっている。 とても真面目だが、おしゃべりや集まり事が好き。家が近いので一緒に帰りながら、電車で日本語教室をしていた時期がある。
Seika	大阪府出身。大学進学を機に上京。2020－2022 年 SIIYM の代表をしていた。初台教会（渋谷区）で日曜学校の先生をしてから麹町教会に来る。麹町教会のさまざまな委員会に関わっている。ピアノ、オルガンの演奏ができる。 語学堪能で、コミュニケーション面のサポートをたくさんしている。SIIYM メンバーだけでなく、麹町教会の大人からも頼りにされている。いつも明るく元気でいろいろな人と話を楽しんでいる。
Valerie	インドネシア出身。国費留学生として来日し、日本語学校、専門学校を卒業し、2022 年 4 月から 4 年制大学の 3 年生として編入した。美術系を学びながらボーカルレッスンを受けている。English Center のスタッフ。歌が上手で、麹町教会の行事のミサでは答唱詩篇を任される。 弾けるような元気の良さがあり、話をするのが好き。みんなから妹の様にかわいがられている。

参考文献

イリイチ，イヴァン

2015『コンヴィヴィアリティのための道具』渡辺京二・渡辺梨佐訳 筑摩書房

遠藤英樹

2008「表象を内破する「コンヴィヴィアリティ」―大阪「新世界」を事例として―」『研究季報』18（3・4）：pp. 9-19

尾添侑太

2018「後期近代における「共同性」を再考する：「共生」／「共在」の比較を手がかりに」『関西学院大学社会学部紀要』（128）：pp. 115-130

川村千鶴子

2006「まえがき」小泉康一・川村千鶴子編『多文化「共創」社会入門―移民・難民とともに暮らし、互いに学ぶ社会へ』慶應義塾大学出版会：pp. iii-ix

木村大治

2003『共在感覚―アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会

サール，ジョン. R.

1986『言語行為』坂本百大・土屋俊訳 勁草書房

———
2006『表現と意味―言語行為論研究』山田友幸監訳 誠信書房
総務省
2006「地域における多文化共生推進プランについて」総行国第 79 号
竹沢泰子
2011「移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会編 2011『移民研究と多文化共生』御茶の水書房：pp. 1-17
田崎敦子
2006「コードスイッチング研究の概観―多言語社会のコミュニケーション分析に向けて―」『言語文化と日本語教育』増刊特集号：pp. 54-84
生井達也
2017「コンヴィヴィアルな場としてのライブハウス―市場原理と贈与交換のブリコラージュによる価値創造―」『生活学論叢』（32）：pp. 1-15
———
2022『ライブハウスの人類学―音楽を介して「生きられる場」を築くこと』晃洋書房
ニャムンジョ，フランシス
2016「フロンティアとしてのアフリカ、異種結節装置としてのコンヴィヴィアリティ―不完全性の社会理論に向けて」楠和樹・松田素二訳『紛争をおさめる文化―不完全性とブリコラージュの実践』松田素二編 京都大学学術出版会：pp. 311-347
———
2019「アフリカらしさとは何か　ウブントゥという思想」梅屋潔訳『世界』（924）岩波書店：pp. 184-196
バック，レス
2015「人種差別主義の廃墟のただ中にある多文化的コンヴィヴィアリティ」太田光海訳『年報カルチュラルスタディーズ』3：pp. 6-31
松田素二編
2021『集合的創造性―コンヴィヴィアルな人間学のために』世界思想社